

Journey through the past

文・谷口 雅春

写真・露口 啓二

# 光を見に行く

## 海と陸と大河、脈打つ地形



石狩川河口

### 石狩市 石狩川河口

土地は生きている。石狩川の河口に立つといつもそう思う。海と陸と大河が巨大な力で拮抗するこの場所には、固定されたものがまるでなんにもない。僕たちはその不確定で流動的な世界の自由さや不思議に引かれる。

石狩川左岸の河口は、石狩灯台からジョギングで数分。距離にして1・5キロくらいだろう。しかし、あつう灯台は海に面して建てられるから、この距離はなんだか中途半端だ。そう思つて明治期の地図を見ると、灯台はずつと海に近い。つまりそのぶん砂嘴が成長して、渚が灯台から遠のいたのだ。石狩川が運んできている石川治さんだ。石川さん

北の天塩川では砂嘴は延々と南に延びているから、海と陸の力で北側に延ばされていつたことがわかる。もっとも道

た土砂が、北上する対馬暖流の力で北側に延ばされていつたことがわかる。もっとも道

人間をはじめたくさんの生きものが関わりあつていてる土地の地形は、太陽や水系と交わりながらいきいきと脈打つている。地域と人々の営みは、こうした複雑なまとまりのほんの一部分なのだと思う。

小樽で生まれ育った古生物学者井尻正二の晩年の著作に『石狩湾』がある。愛する母への追慕と自らの幼年からの時の流れを石狩湾流に重ねた、美しい半生記だ。石狩川河口に立ちながら陸の水の旅の終着を見ていると、あらためて再読したくなつた。

はGPSロガーという装置をもつて河口の波打ち際を7年間毎週歩きづけることで、先端域が季節や天候によつて大きく変動していることを記録した。すべての足跡をマップに重ねていつたのだ。

石狩浜海浜植物保護センタ

ーで開かれていたそのパネル展で話を聞くと、まず、現在では砂嘴の成長がほぼ止まつていることを教わった。石狩川の流れが強くぶつかる右岸が水制工という施設で守られているために、砂嘴に延びていく余地がなくなったことや、上流からの土砂が減つたことが関係しているらしい。石川さんの研究は、水量が減る冬の砂嘴は海に押されて内向きになり、雪解けの春先には、川に押されて海側を向くことを見事に「見える化」した。さらに砂嘴の長さには冬と春では240倍もの伸び縮みがあり、振れ幅も数十倍に及ぶことを明らかにした。石狩の地誌に、なんてすばらしい一節が加わつたことだろう。